青年期のOR

大阪大学工学部　西田　俊夫

ＯＲ学会も創立25周年を迎えて，各種の行事が予定されている．ＯＲも年齢的には青年期に入ったといえるであろうが，必ずしも順調に成育してきたわけでもないし，今後にも多くの問題をかかえている．ここらで回顧しながら，現状を考察するのも無駄ではあるまい．

伸び悩むOR

私どもが日科技連大阪事務所を借りてＯＲ研究会を始めたのは20年ばかり前のことになる．その後，日科技連の関西ＯＲ部会として引き継いできたが，今年の３月で廃止することになった．それは主査としての私の怠慢にもよるのであるが，東京での日科技連のＯＲ教育コースが最近は40名を割るという事情になったことも大いに関係している．

ＯＲ学会の会員数もここ数年は2000名前後を低迷している．20年前の1962年にすでに850名の会員をもち国際ＯＲ学会の会員の10分の１以上であったことを思えば，伸び率はきわめてゆるやかであるといえよう．最近発足した品質管理学会の会員がすでに2000名を超え，情報処理学会にいたっては毎年2000名ずつ増加していることにくらべれば，なおさらその感が深い．

現在わが国の工業製品の品質は世界一を誇るものが多く，それには日本のＴＱＣとかＯＲサークルが大いにあずかっているといわれており，これらの組織はまた日本独自のものでもある．また，日本の生産性も世界一であるといわれ，それが高度経済成長をささえてきた．それには日本のＩＥが貢献しているといわれている．それらに対してＯＲについてはあまり称讃の言葉を聞かない．

それは何もＯＲがさぼっていたのではなく，ただ表面に出ないだけのことだと思える．事実，ＴＱＣとかモダンＩＥといわれる内容には，ＯＲ的なことがかなり含まれており，ＯＲ活動がそれらに吸収されてしまうことが多い．今度ＯＲ学会で，「かくれたＯＲ活動の発掘」の事業を推進し，それを表彰しようというのは，まことに時宜にかなった措置であるといえよう．

ＯＲ学会の最近の特別テーマはかなり実際的なものが多いが，まだ実用的な面からのＯＲの評価はそれほど高いとはいえない．それにはわれわれ学校関係者の責任も大いにあるが，今後地についたＯＲの研究に努力せねばならないと思っている．

問題点は解決されたか

だいぶん古いことになるが，昭和39年に私が書いた小論で「ＯＲの適用の現状と問題点」というのがあり，そこでＯＲ実施に関する種々の問題点を指摘したことがある．それは次のようなことである．

まず，トップのＯＲについての必要性の認識の欠如があげられる．また認識していても，必要な問題の提起を行なわなければ，スタッフの問題のとらえ方と異なるおそれが生じる．

さらに，生産面にくらべて事務面での標準化が

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

おくれていることがあげられる．それが信頼性のあるデータの収集を阻害している．

また，手法中心主義でありすぎるがために，本当に必要な問題の解決に直結していない．ORが応用数学の一分野ではないということは，つとにいわれてきたことである．

現象のモデル化には事務系統の人が適しており，その解決には技術系統の人が必要であるが，その分担作業がうまく行なわれにくい．

これらの問題点は現在すべて解決されているといえるであろうか．いくつかの先進企業にあってはほとんど完全に解決されているといえるであろうが，まだ多くの企業では残されたままである点もかなりあるように思える．

近年のコンピュータの発展はめざましいものであり，マイコン時代に入っている．個人生活の情報化も進んできたこともあって，事務系統の人のコンピュータに関する意識も急速に進んでいる．ところが依然として，事務系の人のORに対する関心はそれほど高いとはいえない．

また，事務の標準化もまだそれほど進んでいるとはいえない．しかしこれについては，OAがもっか大きな関心事になっていることから，近い将来に大いに改善されるものと思える．

技術者と事務屋の協力の問題については，うまくいっている企業もかなりあるようであるが，組織の面でむずかしいところも多い．

OR適用の理想的な環境に早急にはならないであろうが，日本独自のORを醸成していくように努力する必要があろう．

量より質で

OR学会の会員数が伸び悩んでいるといったが，研究面ではどうなっているであろうか．ここ20年間の学会での発表件数を5年ごとにとった結果は次のようである．これはすべて春季研究発表会のものであり，特別講演は除いてある．

年　度	発表件数	会場数
1962	21	1
1967	57	2
1972	51	3
1977	81	6
1982	129	6

この表からわかるように，研究発表の面では着実に伸びてきている．学会活動の活発化は会員の質的充実を物語るものであるといえよう．

ORはもともとQCと異なり，全員で推進する性格のものではない．少数の者が核となって，全社的な問題を効果的に解決するところに本領があるといえよう．今後は学会としても，むやみに規模の拡大をはかるよりも，活動の質的充実に心がければよいのではなかろうか．

ただし上記の所論においては，学会の財政面にはふれていない．それについては学会誌のあり方などを含めて，専門家のご検討をお願いしたい．

1979年の春に韓国のソウルで太平洋地域の国際OR学会が開催されたとき，その学会のシンボル・マークとしてORをうまくかたどった図形が用いられていた．それはOを地球で表わし，Rを人間の姿で表現して，人が地球を転がしていく形のものであった．なかなかうまくできていると思った．

世界を動かしていくのは人間であり，限られた資源の下で，低成長下にどのように行動すべきかは今後のORの大きな課題となるであろう，現在まではQCとかIEが華やかな活動を展開してきたが，種々の難題をかかえた今後こそ，いよいよORの出番になると思われる．国内問題はもちろんであるが，国際的にも提携してORの発展を期待したい．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．